

Title	経済地理学的観察の対象としての経済現象に就いて
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.6 (1937. 6) ,p.835(45)- 858(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19370601-0045
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370601-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は、太陽放射線の電磁作用からばかりでなく、今日では宇宙線なる放射線の作用からも説明されるのである(註)。
この放射線の本體は全く不明と言つてもよいが、併し科學者の不斷の研究は——最近行はれたピカール氏の成層圏飛行の主要目的はこの謎を解かんとするにあつた——近い將來に新しい光を投ずるであらう。

茲では私は唯だ次の事だけは安じて斷定出來ると考へる。即ち天體的現象の影響が、もし事實あるものとすれば、それは必ず幾多の迂餘曲折を経て吾人の經濟生活に表はれるであらうといふ事である。かゝる影響が直接に現はれると考へるには、吾人の持つ社會關係は既に複雑に過ぎるのである。しかし更に、吾人の科學的使命が現象間の因果的關聯の追求にある以上、經濟學研究の對象が常に經濟機構の框内に限定されねばならぬといふ理由はないであらう。吾人が不斷に大なる自然に圍繞され、自然の力に制約されてゐるといふ嚴然たる事實は、動かす可らざるものである。然るにフイジオクラット又はチェーネンの一派に認められた、自然に對する敬虔な態度は、今日の經濟學に於ては無殘に放抛されて了つた。社會科學の進歩の極めて遅々たる主たる所以は、爾後の自然科學に於ける驚異的發達の殆ど採り入れられて居らぬ爲ではあるまいか。本稿が多少とも右問題に關する參考となるならば、私の目的は達せられたのである。(一九三七・五・一六)。

(註) 菊池正士、原子物理學概論、一八五—二〇二參照。

附記 本稿に取扱つた種々の科學的部分についての私の知識は極めて貧弱である。重大な過誤の介在を恐れる。教示を請ふ所以である。尙ほ本稿の各節は始め獨立に執筆されたもので、従つて前後の連絡に不備があり、又無用の重複もあると思はれる。この點、特に寛恕されたい。

經濟地理學的觀察の對象としての經濟現象に就いて

小 島 榮 次

一、緒言

地理學は文化現象の地域的分布を取扱ひ、その地域的分布の決定に關する因果關係の中から法則を樹立しようとするものである。經濟地理學は地理學の一分科として、特に經濟現象の地域的分布に關する法則の探究をその究極の目標とする。従來の地理學及び經濟地理學に在つては、多くの場合、自然と人間若しくは自然と文化現象或は經濟現象との因果關係を探究することが夫々その目標とされた。然し乍ら斯學に於いて取扱はるべき因果關係は、一方に地域の自然的及び文化的條件と、他方にはその地域の文化現象との間に存在する關係であつて、自然對人間の關係でもなければ、自然對文化現象の關係でもない。何となれば地理學の研究對象は地域的分布の觀點から見られた文化現象であつて、人間乃至人間活動一般ではないし、他方文化現象の分布を決定する要因は自然のみでなく、従つて自然對人間或は自然對文化現象の關係のみを取上げること、地理學の究極的目標を文化現象の地域的分布に關する因果法則の探究にありとする立場から見れば正しいと云へない。(三田學會雜誌、第三十卷第一號所載、拙

稿「地理學の本質と地理的環境に就いて——經濟地理學方法論に於ける一斷想——」(參照)

斯くして地理學的研究に於いては、自然的及び文化的條件の觀察及び文化現象の觀察から出發して、兩者の關係の考究が行はねばならぬ。經濟地理學的研究にあつては、經濟現象に就いて同様のことが云はれ得る。然らばこの經濟現象の觀察は如何なる手續きに基いて行はるべきか(註一)。それに就いて以下少しく述べてみたいと思ふ。

(註一) 經濟地理學的研究に於ける自然的及び文化的條件觀察の手續きに就いては、殊に前者に就いて多少詳細に、本誌第三十卷第九號所載の拙稿「經濟地理學に於ける自然環境觀察の意義及び手續きに就いて」に述べて置いた。

二、地理學的なる研究手續き

地理學に於いては、文化現象が地域的に如何に分布されて居るか、その分布は如何なる自然的及び文化的要因に依つて決定されて居るかが研究される。この事から斯學に於ける研究手續きが當然の結果として規定されて來る。即ち地域的な比較といふことが、先づ第一に最も基本的な研究手續きとなるのである。例へば都市の分布・鐵道の分布・米産額の分布・等を示すといふことは、すべてこれ等に就いての地域的な比較を伴ふ。或はむしろ地域的な比較そのものと云つても宜いであらう。氣温・降雨・埋藏鐵礦等の自然現象にしても、その分布を示すことは結局地域的な比較に過ぎぬこと云ふまでもない。要するに一地域に存在する現象が、他の特定の地域に全く存在しないか或は比較的に少い量に於いて存在するかを示すことが即ち、その現象の地域的な分布を示すことなのである。

この見解に従へば、地理的研究の表現の最も重要なる形式として古來用ひられて來た地圖は、この基本的な研究手續きの一つの技巧である。土地の高度・河川・海洋・都市・森林・耕作地・鐵道等の配置を綜合的に示して居る地圖は、吾々の日常に最も親しみあるものであるが、等温圖・人口分布圖等の特殊事項をのみ取扱ふ地圖にしても、或は更に農産物分布圖・農業人口分布圖の如きものにしても、すべて地圖なるものは現象の地域的な分布を示すのであり、換言すれば現象の存在の有無或は存在の量の大小に就いての地域的な比較を示すものである。尤も地域的な比較は、必ずしも常に地圖に依らねばならぬわけではない。地域の單位が吾々の常識として明瞭に知られて居る場合例へば大陸とか若干の強大國とかの場合には、地圖よりも何等か他の統計圖表に依つて地域的な比較を行つても、特に地圖として表現するのとその効果に於いて重大な相違を認められぬこともあらう。更に又、立體的模型或は航空寫眞等の方法に依ることが、却つて大なる効果を齎す場合があるかも知れない。

要するに地理學的なる研究手續きの最も基本的な部分は地域的な比較であり、地圖・統計圖表等はその實施の爲めの技巧である。而してこの事は經濟地理學の場合に於いても云はれ得る。經濟現象と地域の具備する自然的及び文化的條件との因果關係を探究することは、特定の地域に分布された經濟現象と他の地域に分布されたそれとを比較し、更に又これ等の地域に於ける自然的及び文化的條件に就いての相違を明かにすることに依つて行はれる。假に一地域の特定の經濟現象のみを取上げて、その地域の自然的及び文化的條件との關係を考究する研究が行はれるとしても、その場合でも他の地域との比較は必然的に含蓄されて居るのである。例へば本邦内地に於ける米作に就いて經濟地理的な研究を行つたとする。その場合に本邦内地を更に狭い地域に分つて各地域に對する觀察を行ふなら

ば、そこに地域的比較が行はれることは云ふまでもない。然し乍ら本邦内地をその儘全體として取上げて觀察する場合でも、他の地域との比較が必然に含蓄されるのである。何となれば、本邦内地の米作なる事象を吾々が如何に認識するかが、先づ他の地域に於ける米作との比較を前提として行はれるか、或は又斯かる比較を豫想して行はれるかである。例へば本邦内地産の米が特定量の良質米なる事實に對して地理的研究を行ふとすれば、明かに他の地域に於ける米の品質との比較が前提とされて居る。或は又、その集約的耕作の事實に對して同様な研究を行ふとしても然りである。若しも假に内地産の米を自然科学的な没價値的な或る化學的成分の合成體として取上げるとすれば、研究の出發點に於いては地域的比較と無關係であり得るが、その自然的及び社會的條件の考究に際して必然的に地域的比較が含蓄される。集約的耕作の事實を耕作地面積當りの勞働及び資本の量として取上げても同様である。前者の場合には例へば本邦に於ける農業技術の發達とか、後者の場合には例へば本邦の資本主義的發展の現段階とかが夫々問題にされるであらうが、これ等はいづれも地域的比較を伴つて居るのである。

斯くして地理學的研究從つて又經濟地理學的研究は、すべて地域的比較から出發する。これは地理學の本質から規定されて來るところの地理學本來の研究手續きであるといふ意味で、地理學的な研究手續きと云ふことが出来る。然し乍ら右の論述の間に、更に説明を必要とする二つの問題が含まれて居る。即ち一つは地域設定の仕方であり、他の一つは比較の爲めの量的表現の問題である。以下これ等の問題に就いて私見を述べよう。

三、地域設定の仕方

地理學的研究の究極的目標が、文化現象の地域的分布と自然的及び文化的條件との因果關係に關する法則の樹立である、といふ見地をとるならば、先づその地域とは如何なるものか、その設定の仕方は如何といふ問題に解答が與へられねばならない。

こゝに云ふ地域とは地球表面に於ける或るひろがりであつて、地理學的觀察に當り吾々の設定する地表面積の單位である。従つてそれにはその時の觀察目的に應じて廣狹無數の種類があり得る。大にしては大陸・國家・ブロック經濟を構成する數個の國家から、小にしては一國內の一地方・一地方内の一村落・等に至るまで、廣狹いづれの地域をとることも差問ない。これ等はすべて政治的境界を基準とするものであるが、これに對して、地理學的研究に於いては、特殊の地域が設定される場合もある。即ち諸種の氣候帯に從つて地表を數個の地域に分つが如き、文化の型を標準にして例へば西歐文化地域・東歐文化地域・東洋的文化地域・印度文化地域・その他を分つが如き、或は又反射經濟・本能經濟・傳統經濟・科學經濟の所謂經濟發達階段に依る地域の區分法の如きこれである(註三)。或は又、主要産業に應じて農業・水産業・畜産業・林産業・鑛業・工業・商業・等の各種地域に分つ場合もあり、或は物産に應じて米作地帯・小麦地帯・棉花地帯・等を分つことも出来る。更に又、政治的境界に從ふにしても、その經濟的發展の段階に應じてそれを高度資本主義の國・資本主義發展の中位段階にある國・植民地半植民地及び隸屬諸國に分つ試みも可能である。(橋本弘毅譯「經濟地理學の諸問題」昭和十一年刊、三一六—三二九頁參照)斯くの如く、地域の設定の仕方は多種多様である。

(註二) 地域設定の方法に就いては、黒正博士の「經濟地理學總論」昭和十一年刊、六八一—一〇四頁参照。そこには從來の主要な學者の方法が分類整理され説明されて居る。又 Isaiah Bowman, *Geography in relation to social sciences*. New York, 1934. pp. 144-199. にも各國地理學者の地域設定方法が紹介されて居る。

これ等諸種の地域のうち政治的境界をその儘に用ひたるものを除けば、他のものは地理學者が特に設定したる地域である。従つてそれは、地理學的研究の出發點としての地域設定と云ふよりは、むしろ研究の歸結としての地域設定と見ることも出来る。而してそれ等は又、政治的境界とか或は例へば氣候地帯の設定の場合に於ける氣象觀測所の管轄區域の如き、何等かの與へられたる地域に就いての素材から設定される場合もあり、地理學者の實地踏査に依つて設定される場合もある。いづれにしてもそれ等は研究の結果として始めて設定されたのであつて、研究の出發點に於いては何等かの假設に従つて暫定的に設定されたに過ぎない。

地理學を以つて地域の個性を記述する學問と看做す場合には、地域の設定換言すれば地表を何等かの個性に従つて地域に區分することは、筆者が上述して來たやうに單なる研究の手段でなく、研究の重要な目標と考へられねばならない。従つてその出發點に於いて、何等かの假設に依る暫定的な地域を區劃することは容認される。然し乍ら上述して來たやうに斯學研究の目標を文化現象と地域の持つ自然的及び文化的條件との關係に置き、研究の出發點として地域的比較を行はんとする場合、そこに取上げられる地域は、暫定的に設定されたものであつてはならない。研究の歸結として區劃されたものでなければならぬ。従つて地域的比較から出發せんが爲めには、更にその

準備行爲として地域設定の爲めの研究が先づ行はれねばならぬ場合が生じて來る。何となれば、文化現象と地域の自然的及び文化的條件の關係を探究するが爲めには、政治的境界を地域の單位として用ふるのみでは不十分だからである。吾々にとつて、或る文化現象が自然的及び文化的條件を異にする諸地域の間如何に分布されて居るかを研究すると同時に、逆に或る自然的或は文化的條件が文化現象の相違に従つて區分された諸地域間に如何に分布されて居るか——これは結局、共通の自然的或は文化的條件の下に如何に相違した文化現象が分布されて居るかといふことになるが——を求めねばならない。例へば小麥耕作が氣候の相違した地域に如何に分布されて居るかといふことと同時に、同じ氣候の地域に諸種の穀物耕作が如何に分布されて居るかといふことを見ねばならない。斯くの如き場合に吾々にとつて先づ必要なのは、政治的境界を基準とする地域ではなくして、小麥の耕作の行はるゝことを以つて區劃された地域であり、又同一の氣候に従つて設定された地域なのである。

斯くの如く地理學の基本的研究手續である地域的比較を行ふが爲めに地域設定の必要が生ずるのであり、その地域の種類は前述の如く研究の目的に従つて極めて多種多様である。然し乍らこれ等多種多様の地域は、地理學的研究上に於いて皆等しい重要性を持つものでない。然らばそれ等の中で最も基本的な重要性を持つものは何かと云ふに、それは一國の政治的境界を以つて區劃した地域であらう。帝國の場合にはその植民地を含まず本國のみの地域であり、植民地の場合には本國から分離された植民地のみ地域である。蓋し斯かる意味での一國の政治的境界が區劃する地域は、その中に存在する經濟・政治・宗教・その他あらゆる文化現象に對して、その地域に存在することの

結果として、何等かの特殊性を持たしめて居るからである。斯くの如き意義を持つ地域は他に見出すことは出来ない。吾々が何等かの研究題目に従つて如何なる地域を區劃するとしても、その研究の道程に於いて必ず國といふ地域が附與する特殊性を考察せざるを得ない。經濟的發展の段階に従つて區分された地域は、恐らく國土に次いで重要であらう。何等かの文化現象がその地域の經濟發展の段階の如何に照應する形ちをとることは、否定出来ぬと考へる。然し乍らこの標準から同一地域として區分されたとしてもその内部で異なる國土に屬する二つの文化現象は、夫々その分布する國土を異にする結果として、互ひに異なつた特殊性を持つに至る。して見れば、國土なる地域は、最も基本的な意義を持つものであると云はねばならない。

然るに從來の地理學者はこれと全く異なつた見解を持つが如くである。米國の或る地理學者は次のやうに云つて居る。「地理學者は多種多様の地域を用ひて作業するが、それ等の大部分は三種に大別される。即ち政治的・自然的・及び地理的の諸地域である。政治的地域は、すべての種類の統計が政治的區劃に基いて居り、従つて極めて取扱ひに便利である爲めに、先づ最初に用ひられた。然し乍ら、斯かる境界線は全く假想的であり人爲的であるが故に、それ等は『地理的憎まれ者』(a geographical abomination)となり了つた。抑々ウヅ湖以西のカナダと米國を分つて居る境界線にもまして人爲的な地域の境界線を想像出来ようか。この二國は自然的或は人種的のいづれの境界線に依つても分けられて居ないのである。」(C. Langdon White and George T. Kenner, Geography. An introduction to human ecology. New York, 1936. p. 674.) 人種が同じであつても自然に就いて相異が見られなくとも、境界

の一方の人間はカナダ人であり他方は米國人である。その相異を齎して居るのは國境線であり、従つてそれは立派に實在的な線である。人爲的であらうとなからうと問題ではない。斯くして筆者の見地よりすれば、國土の境界線に依つて區劃された地域が最も基本的な意義を持つものであり、地域的比較が如何なる形ちで行はれるかを問はず、この基本的地域に就いての比較との關聯を忘れることは出来ない。蓋し研究の題目が一國內の局小地域に於ける何等かの文化現象であつても、國土の持つ文化的特殊性の影響を受けざるを得ない。

この意味に於いて、經濟地理學的研究に際しても、各國の經濟發展の段階及びその特殊性を理解することが、研究の出發點に於いて先づ行はねばならない。而してこれは特に地理學固有の研究でなく、經濟學的な研究である。地理學的研究は、斯かる地域的差異を、それと各地域の自然的及び文化的條件との因果關係を考究することに依つて、説明しようとするものである。換言すれば經濟地理研究は、先づその出發點に於いて既に斯かる重大な寄與を經濟學から受けねばならぬ。(註三)

(註三) 然し乍ら地理學の他の諸分科に於ける研究に就いても、この點に關する限り同じことが云はれると思ふ。蓋し經濟と政治・宗教その他との間には密接な關聯が認められるが故に、經濟學的な研究の援助を受けることは、經濟地理學以外の地理學諸分科の領域に屬する諸種の文化現象のすべてを通じて、それ等を正しく理解するが爲めに必要である。

四、經濟現象の觀察

經濟地理學的研究に當つては、他の地理學諸分科と同様に、先づ地域的比較から出發する。従つて經濟現象の觀察經濟地理學的觀察の對象としての經濟現象に就いて

察も、何等かの標準で限定されたる地域の中に在る現象に對して行はれねばならない。換言すれば、地理學的觀察の對象としての經濟現象は、先づ地域的に何等かの限定を受けるのである。次にそれは又經濟現象それ自體の範圍に就いて限定されることとなる。地域設定の場合と同様に、こゝでも觀察する現象の限定の仕方は殆ど數限りなく存在するであらう。然し乍ら大別すれば、一地域内の經濟現象を綜括的に全體として取上げる方法と（例へば日本經濟地理）、その何等かの一部分を限定して觀察する方法との二種類に分はられる。而して後者は又その中で細分類が行はれ、即ち第一には、生産及び流通の全行程を、それを構成する幾つかの部門に區分して、その一部門を觀察する方法、第二には、一種或は數種の商品或は勞務を中心として第一の方法で限定された諸部門中の更に細い部門を限定するもの、第三には資本・勞働等の經濟的諸要因に就いて範圍を限定するもの、第四には、第一及び第二と第三との組合せの方法がある。勿論これで全部が盡くされたとは云へないが、主要な限定の仕方は大體含まれて居り、殘されたものはこれ等の中いづれかの修飾された形のみであると思ふ。第一のものは例へば農業地理或は商業地理の研究の如きを含む。第二のものは、例へば小麦・羊毛・石炭・鐵道等の如きを中心として、夫々農業・畜産業・鑛業・交通運輸業等の一部分を限定するものである。第三は例へば資本の集中・勞働賃銀の如きものを含み、第四は例へば交通産業に於ける資本の集中又は勞働賃銀といふが如き題目の研究となる。

云ふまでもなくこれ等はすべて前述した多種多様な地域と組み合せをなすのであるから、殆ど無限と云つてもよい程の變化が出来る。しかもそれ等の數限らない細部的な研究が全體として結合され、地理學究極の目標に近づく

ことを可能ならしめるものでなければならぬ。細部的な研究はこの意味に於いてのみ學問的價值を持ち得ることは云ふまでもなからう。従つて研究題目とする經濟現象の範圍を如何に限定するかは研究者の任意であるけれども、この場合でも地域限定の場合と同様に、種々の限定の仕方の中に自ら重要性の相違が見られると思ふ。而して最も基本的な重要性を持つやうに見えるものは、一國の經濟現象を總括的に觀察する場合であらう。蓋し一國の經濟が或る特定の段階に發展して來たのは、個々の經濟現象の作用反作用の綜合的な結果であるが、然し乍ら既に全體として一國の經濟が或る纏りを以つて形成されて居る以上、この全體に依つて個々の經濟現象はすべて強力な影響を與へられる。而してこの影響は一國經濟の發展段階の如何に應じて異なるのであるから、その意味で個々の經濟現象の綜合的全體としての一國經濟は、結局或る經濟發展の段階として現される。斯くして地域設定の場合と同様に、觀察すべき經濟現象の範圍を限定するに際しても、一國の經濟を全體として觀察し、その現在の段階を理解することが最も重要になる。

然し乍ら斯かる觀察及び理解は、その儘では地理學的研究ではない。同じ段階に在り乍ら地域の相違に従つて現れて居る特殊性を見出して、それと地域の自然的及び文化的條件との關係を探るか、或は又異なる段階に在る二地域を比較して、經濟的發展の上に斯かる相違を齎した要因が、兩地域の自然的及び文化的條件の間に如何に求められるかを探る場合に、始めて地理學的研究となる。然し乍らこれ等はむしろ地理學の結論的部分に近接する研究であつて、その前に多くの準備的な研究が必要であらう。即ち經濟學的研究に依つて、經濟的發展の現段階

を理解した上で、一國經濟の一部分毎に地理學的研究を行ひ、それを基礎として右に擧げたやうな一國經濟全體に關する研究が行はるべきであらう。然らば經濟現象を實際に地理學的に觀察しようとする場合、如何なる態様でその範圍を限定することが最も重要な意義を持つかと云ふに、生産及び流通の全行程を若干の部門に別ちそれ等を部門別に觀察する場合、その部門の分ち方の如何に依つて最も基本的な意義を持たしめることが出来るであらう。即ち農業・水産業・畜産業・林産業・鑛業・エネルギー産業・工業・商業・交通運輸業・等の所謂産業別の區分の如きも、その夫々がその内部に於いて例へば資本の組成・勞働過程・等に就き多くの共通點を有し乍ら他方に於いて他の諸産業と相違するところから見て、これを單位として地理學的觀察を行ふことが最も基本的意義を持つ方法であると思はれる。何となれば、産業として區分された各部門の性質が右の如くであるから、より細部の現象に關する研究に於いても、或は又より廣汎な研究例へば一國經濟の總括的研究の如きに於いても、産業別の研究が基礎となるからである。

然し乍ら勿論こゝに掲げた區分を以つて満足のものとは看做すわけではない。同じ工業に屬しても重工業と輕工業との間には多くの相違點があるし、逆に工業と鑛業とは實際上區別が困難な場合がある。且つ又地理學固有の見地から何等かの區別方法が可能なのではないかと思ふ。然し乍ら從來の有力な地理學者に就いて見ても、何等この點に關して努力が拂はれて居るやうに見えない。従つて右に擧げたやうな或はそれに類似の區分が、現在のところ吾々の利用し得る最上のものと云はねばならない。且つ又右の區分法に於いて、多少の地理學的な意義が認められ

ぬわけでもない。即ち農業・水産業・畜産業・林産業・鑛業・等の所謂原始産業と・エネルギー産業・工業・商業・交通運輸業等との間に、自然的條件に直接に依存する程度の差異が存在し、原始産業及びエネルギー産業の中でも水力電氣事業の如きは、直接に自然的條件に依存する程度が最も大きく、工業及び交通運輸業が大體に於いてこれに次ぎ、商業に至つては最も小さい。而して原始産業の中でも鑛業を除けば他はすべて變化し易い自然的條件に依存して居り、従つてこれ等が主要な地位を占める地域は、比較的に經濟の安定を欠くことになる。同様に、この産業區分が現して居るところの産業間の諸種の相違點に對しても地理學的な意義を認めることが出来るであらう。

要するに研究者は、夫々の題目に従つて大小廣狹各種の經濟現象の中から適當のものを選び出すことは自由であるが、上述したやうな産業別の研究は特に基本的意義を持つのである。

五、經濟現象に對する地理學的觀點

經濟現象の地理的研究の爲めに、吾々は先づ地域を設定し、更に研究しようとする經濟現象の範圍を限定する。次に吾々は斯くして定められた觀察の對象を如何なる觀點から眺めるかを決定しなければならぬ。

地理學は文化現象の地域的分布を觀察する。特定の種類の現象が異なつた地域の間如何に分布するか、又如何に異なつた形態で分布するか、その分布の有無或は形態の相違を生ぜしめて居る各地域の諸條件は如何なるものであるか、等を考究する。斯くして地理的條件或は地理的環境と文化現象の因果關係を明かにしようとするものである。従つて前述の如く、幾つかの地域にわたつて同種類の現象の分布状態を比較することが、研究の出發點に於ける。

る根本的な手續きとなるのであつて、結局それに依つて地域的特殊性を明かにせんが爲めである。從來この地域的特殊性の闡明を以つて地理學の究極目標とした人々があつたが、右に述べて來たやうに、これは研究途上の一階程に過ぎない。更に次の階程即ちこの特殊性と地理的條件との因果關係の探究へ進まねばならぬのである。

經濟地理學の場合には、經濟現象に就いて同じことが云はれ得る。即ち先づ吾々は幾つかの地域にわたつて同種類の經濟現象の分布状態を明かにせねばならない。例へば、各地域の經濟現象を總括的全體として取上げ、經濟的發展の段階が各國又は各氣候帶の間に如何に分布されて居るかを明かにする。或は又諸地域間の農業の分布・その形態の相違等を明かにする。従つて表面上地域的比較を伴はざるが如き研究例へば本邦に於ける米作の研究の如きでも、事實上地域的比較を伴ふか或はそれを豫定する素材的研究かであつて、いづれにしても地域的比較なる根本的手續がその中に含蓄されるのである。

斯くの如く地域的比較に依つて各地域の特殊性が明かにされたとすると、次にこの特殊性の生成に對して、地理的條件或は地理的環境が如何なる役割を演ずるかを考究せねばならぬ。何となれば、地域的特殊性の生成には時間的經過も重要な役割を勤めるからである。即ち時間の經過に伴つて文化現象に變化が起こるが故に、従つて一定時點に於けるその現象と地理的條件との結合状態を他の時點に於けるそれと比較する場合、そこに相違が見られることは云ふまでもない。地理的條件それ自體ですら、一定時點の文化に照應する相對的性質のものであるから、時間の經過に伴ふ變化を免れることは絶対に出來ない。従つて地理學が地理的條件と文化現象との關係を究明しようとす

るならば、地域的特殊性を生ぜしめた重要な要因としての時間を區別せねばならぬ。具體的に云へば地域的特殊性の歴史的考察が常に必要なのである。斯くして地理學的研究は歴史學の大なる援助を受けねばならない。

右に述べて來たところで明かになつたことは、地理學的研究に於いては經濟現象が動態的に觀察されねばならぬことである。而してこれは單に、現在に於ける經濟現象の地域的分布を、地理的條件と時間的經過との所産として見るといふ意味ではない。過去現在未來を通じて常に變化しつゝあるものとして見るといふ意味である。従つて特定の經濟現象が特定の地域に分布されて居るのは如何なる地理的條件との因果關係に基いたかといふ過去にのみ關する研究ではなくて、一般に過去現在未來を通じて經濟現象の變化發展に對する地理的條件の役割を究明するのである。換言すれば、何故特定の地域に分布したかではなくて、何故特定の地域に分布するか因果關係を明かにせねばならない。地域的比較は一定時點に於ける各地域の經濟現象の比較であつて、恰も靜態的觀察を行ふやうに見えるが、これは地域的特殊性を知る爲めの研究の手續きに過ぎぬのである。

扱てあらゆる事象の變化發展の過程は、時間及び空間だけでなく、中心的に事象の本質に依つてきまることが云ふまでもない。例へば經濟活動の基本的性質即ち生活に必要な物質的基礎の獲得なる側面は客觀的に存在する事實であつて、時間空間の如何に關せず人間の生きる限り行はれる。時間の經過及び地理的條件の利用に基いて、人間は或る場合には極めて複雑な而して各地域毎に特殊性を持つ經濟生活を行ふやうになつた。斯くして經濟現象の變化發展の過程は、時間及び地理的條件の他に、現在の各地域に於ける經濟生活の性質に依つてもきまるのであつて

この點に於いて經濟地理學は經濟學の成果を研究の基礎とせねばならぬのである。

六、地理的環境としての經濟現象

經濟現象と地理的環境即ち地理的條件との因果關係を明かにするものが經濟地理學であるが、この地理的環境は、自然的の部分即ち自然環境と人間活動の結果なる部分即ち文化環境とから成る。地理的環境とは場所に多少固定的に附屬してその場所に分布される經濟現象の種類・形態・等を決定する要因となるものであつて、文化環境は其中で人間の社會活動の結果たるものを云ふ。例へば交通設備・都市の分布・政治的事情・等である。結果と云ふよりはむしろ社會生活の諸事實そのものと云ふべき部分も含まれる。即ち他の言葉を以つてすれば、社會生活の諸事實中、制度化したるものを意味するのであつて、これ等はすべて人間の社會生活の結果として現れて居るものである。従つて人間の社會生活の部分々々が全體として一定の體制を持つて居るやうに、この文化環境の諸部分の間にも自ら相互的關聯があり、全體としてやはり何等かの體制を持つて居る筈である。而してそれが社會生活の所産である以上、その社會生活に於いて基本的な部分が即ち文化環境の基本的部分を構成する。それは何かと云へば、吾々の生活を維持する物質的基礎の獲得維持に關する諸事實即ち經濟關係の諸事實である。斯くして一地域の經濟的發展の段階の如きは、文化環境の基本的部分をなし、他の一切の部分はこれに依つて規制されて來る。勿論文化環境の他の部分即ち政治・道德・宗教・その他の方面の事實にしても、制度化した以上は、基本的部分へ反作用する力を持つことは明かであるが、それにしても經濟關係の諸事實就中經濟的發展の段階・それに照應する技術的體制の如きが基本的部分であることに變りはない。

斯くして經濟現象は、同時に原因たる文化環境の基本的な部分となり、且つ又その結果ともなるといふ一見奇異な結論に達する。然し乍らそれに関して何等矛盾はないと思ふ。殊に一地域に於ける經濟現象の總括的全體が構成して居るその地域の經濟的發展段階を環境として考へる時は、右の因果關係は明かである。何となれば個々の經濟現象が集まつて一地域の段階が現れて居るのだが、それがひと度全體として纏まつた後は、個々の現象はその全體から制約されざるを得ない。個々の現象にとつて、それは恰も自然的條件と同様に、所與のものであるかの如く作用する。一國內の局部的地方の經濟現象に對しては、その國全體の經濟的發展段階は尙更決定的な要因となる。

部分的な經濟現象が他の部分的な經濟現象の環境となることも、決して不思議でない。何となれば、一國の經濟的發展の段階から部分的な經濟現象へ及ぶ制約は、直接的には他の部分的な經濟現象を通じて行はれるが故である。例へば一地域の農業を觀察して、その生産額の減退がその地域の工業の發展に基く産業的構成變化の結果として生じつゝあることを見出したとすれば、この場合工業の發展は直接の原因であり農業の衰退は結果である。然し乍ら根本的な原因はその國の經濟的發展にあると云はねばならない。

右の如く觀察の對象となる經濟現象の範圍が一産業を單位とする場合には、特定の一産業に對して他の産業はすべて環境と看做すことが出来る。何となれば、諸産業は全體として均衡を保つて居る筈だからである。従つて或る産業に於ける變化が或る程度に達すれば、他の諸産業にもそれに照應する變化が起こつて第二次の均衡状態に達す

る。斯くして産業は或る時は徐々に或る時は急速に絶えず變化を続け乍ら、均衡からその破壊へ而して次の均衡へと移つて行く。經濟地理學的研究に於いては、後述の如く比較的恒常の状態のみを取扱ひ、變化又は動搖を取扱ふとしてもそれ等が恒常なる場合にのみ取扱ふのである。従つて均衡破壊の過渡的狀態にある場合は普通取扱はないのであつて、前述の如く特定の産業に對して他の諸産業をすべて環境と看做すことが出来る。但し一産業の對外國關係が變化し従つて該産業に重大なる變化が見られるに至つた如き場合では、それが他の諸産業に變化を齎して新しい均衡を生ぜしめる程のものであつたならば、該産業自體が他産業に對して環境と看做されるであらうし、同時に又それ自體に對しては、外國との關係を環境と看做すべきであらう。産業以下の細部の經濟現象の場合に於いては、その文化環境中に含まれる經濟現象としては、以上に擧げて來た諸種の現象に加へて、最も直接的なる環境としてその所屬産業の構造・同産業内の他の細部分・等が擧げられよう。

斯くの如く經濟現象は環境ともなり結果ともなる。幾つかの特定の經濟現象を觀察してそのいづれを環境としいづれを結果とするかは、結局事實上の關係に従ふより他はないけれども、大體に於いて經濟現象の集團はそれが大ならば大なる程環境と看做し得る場合が多いと云へるであらう。且つ又各國は夫々その發展段階を表すやうな特殊の産業的構成を持つて居り、諸産業間に比較的重要なものと然らざるものがある。故に産業別に觀察される場合、より重要な産業が環境と看做される場合が多いであらう。

こゝで次の如き疑念が生ずるかも知れぬ。即ち一産業に對して他産業を環境と看做すことは、假に經濟現象以外

の文化環境を皆無と假定すると次の如き結果となるではないか、即ち、細部の研究は多く組み合されて始めて學問的價値を持つものであるが、今ABCの三つの産業のみを所有する社會に對して、この三つを夫々觀察した結果を綜合しようとしたところ、AはBCの結果であり、BはAC、CはABの結果であるとしたら、何の意味もなさなくはないか、といふ疑念である。然し乍ら前述した通り、諸産業は相集まつて均衡状態にあり、相互に影響し合つて居るのであつて、従つて細部の研究が右の如き結果となることは決して無意義でなく、それ等が組合される時恐らく諸産業相互間の關係を明かにする効果を持つであらう。

七、經濟現象の地域的比較

經濟現象の地域的比較を行ふが爲めには、上述せる如く、先づ地域の設定・經濟現象の範圍の限定を行ひ、更に又、經濟現象を地理的環境及びその結果の二種類に區別する必要がある。斯くして地域的比較を行ひ、地理的環境と經濟現象の關係を探究するのであるが、最後に經濟現象の觀察に就いて、述べねばならぬ事項が二つ残つて居る。その一つは、經濟地理學に於いて取扱ふ經濟現象は、すべて恒常的な性質のもののみであるといふことで、例へば一國の國內市場へ他の國から或る商品の巨額のダンプینگが行はれて價格の暴落した場合とか、或は又重要農産物の大凶作となつて該農産物の世界的値上りを齎し、他方農民は非常な収入減少を見た場合とか、いづれも臨時的な異常な現象で經濟地理學の本來關心を持つところでない。經濟地理學は、經濟現象と地理的條件の因果關係を明かにするものであつて、當然各地域に於ける恒常的現象のみを取扱ふ。何となれば、右に擧げた如き異常なる突發

的事件は、それが導火線となつてその國の經濟に著しき變化が起こりしかもそれが恒常化するのではない限り、その地域の地理的條件と吾々の考慮に値ひする因果關係を持たないからである。勿論變化或は動搖でも、それが却つて恒常的現象をなす地域に對しては、それが如何なる地理的條件に依るものなるかを考究すべきである。而してこれは經濟地理學のみならず、他の地理學分科に就いても同様であることは云ふまでもない。

第二の殘された事項は、量的表現の問題である。地域的比較を行ふが爲めには、各地域の經濟現象が量的に表現されて居ることが望ましいが、それは可能であらうか、或は又その方法は如何、といふ問題である。

經濟現象の諸側面の中で一見量的なものがある。例へば生産物數量・職業別人口・用途別土地面積・使用動力量・各種交通機關の數・商品輸出入額・等である。これに反し質的な側面例へば耕作形態・經濟的發展の段階・等がある。然し乍ら一見して量的側面と看做される部分でも勿論質的な側面を伴つて居るし、その反對に質的な側面と見えても量的な側面を含むで居る。生産物數量と云つても一定の質を持つ生産物の數量であり、職業別人口・用途別土地面積に就いては夫々職業・用途なる質の側面を含み、使用動力量にしても動力源に就いての質的な側面を伴ふ。反對に耕作形態にしても、一農家當り耕作面積とか、各種農具の耕地面積當りの數量とか、同様に耕作従事者數・その他の量的側面を含む。従つて經濟現象の地域的比較は、完全には勿論ないが吾々の目的から云つて十分な程度に、量的表現に依つて、行ふことが出来る。技術上の困難は別として、論理的には確かにさう云へるのである。従つて地域的比較はかなり十分な鮮明さと客觀性とを以つて行ひ得ると云ふことが出来る。これは經濟地理學に限らず地理學

一般に就いても云はれ得る。例へば聚落形態にしても、用途別土地面積・様式別家屋戸數・職業別人口比率・その他の量的側面を分析することに依つて、かなり量的に表現することが可能であり、従つて地域的比較がかなり明確に客觀的に行はれ得る。各種の所謂「型」の比較に就いて、一般に同じことが云はれると思ふ。

八、觀察の焦點

量的表現の問題は、經濟地理學に於ける經濟現象觀察に關して殘されたも一つの重要な問題即ち觀察の焦點を何處に置くかといふ問題に密接な關聯を持つ。

經濟現象はどんなに細部的のものであつても、殆ど數知れずの多くの側面を持つ。其處で生産或は取引される商品或は勞務・それに關係する人々・資本・その時間的及び場所的ひろがり・等の各方面に大別され、その夫々が又多くの側面を含むで居る。従つて吾々は特定の現象の全側面を觀察することは不可能であり、必然的に或る部分を抽象し他を捨てねばならぬ。而して又抽象した側面の中でも、特に重要な中心的なるものと然らざるものとを識別せねばならぬ。

然らば斯かる中心を如何なる側面に求めるかと云ふに、それは生産され或は取引される物資又は勞務の品質及び數量であらうと思ふ。何となればすべての經濟現象の質的量的差異は、多くの場合そこで生産され或は取引される物資又は勞務の質及び量の差異として端的に表現されるからである。従つてこれを中心としてこれに關聯する重要な側面が更にか抽出されることになるのであつて、貨幣經濟の行はれる地域では、資本・勞働・勞働對象に關す

る重要な諸側面が取上げられ、右の中心的側面と共に、すべて質・量・價格の三點に就いて觀察されることになる。就中特に數量は中心的である。何となれば、數量は要するに何等かの品質又は價格を持つものの數量であつて、品質或は價格をその中に含むからである。

經濟地理學的觀察に於いて斯かる手續がとられるのは、前述の如く觀察の焦點を定めるといふ要求の他に、特に地理學的研究上の要求に基いて居る。それは即ち地域的比較の爲めに量的表現を行はんとする要求である。例へば、特定地域で生産される小麥と他の地域で生産されるその數量の差はどうして生じてるか、から出發してその生産をめぐる諸關係、例へば耕作面積・従事者數の差異、或は又耕作形態の差異を求め、これ等の差異は如何なる地理的條件に基くかの考究へ進むことが出来る。斯くの如く經濟現象の地域的比較に依つてその地域的特殊性を求めるに當り、生産され或は流通に附される物資又は勞務の數量に従つて比較を行ふ方法が最も基本的なものとして考へられるのである。勿論特殊の場合に依つては、この以上の方法もあるに相違ない。然し乍ら何等かの基本的方法を決定して置くことは、細部的な研究を全體として結合せしめる上に必要であり、他方に於いて生産され或は取引される物資或は勞務の數量は、地域的特殊性を最も端的に表現する指標であると考へられるが故に、これを以つて基本的方法と定めて置くことが最も望ましいと思ふのである。或る場合には右の物資或は勞務の數量の等しいことが、却つて地域的差異を意味することがあり得る。即ち勞働者數及び資本に就いて差異があるにも拘らず、生産物數量の等しい場合である。従つてこの物資或は勞務の數量は、勞働者一人當りに就いて示されるか、或はそれと類似の

何等かの形式で示される場合に最も完全にその機能を果し得るものとならう。

九、要約

經濟現象を地理學的に觀察するには地域的比較を行はねばならず、それが爲めに先づ地域を區劃する。その際、地域は多種多様の仕方に依つて設定されるが、その中で最も基本的意義を持ち且つ最も明確なものは一國の地域である。(第二・三節)

次に觀察さるべき經濟現象の範圍を定めねばならぬ。この場合にも又その方法は多種多様であり得るが、基本的な單位は生産及び流通の諸部門である。その諸部門を如何に區分するかに關しては、特に地理學的方法とも云ふべきものがない。然し乍ら所謂産業別の區分方法は、若干の地理學の意味を含み吾々が採用するに甚しく不適當でない。(第四節)

さて經濟現象の範圍を定め地域を區劃して地域的比較を行ふのであるが、その比較をして正確ならしめる爲めには、經濟現象の量的客觀的表現を必要とする。斯かる量的表現に依る比較の基準として、生産され或は流通に附される物資或は勞務の數量を採る。(第七節)

斯かる手續から經濟現象觀察の焦點が定められたことになる。即ち生産され或は流通に附される物資或は勞務の數量を中心として、品質及び價格から更にそれをめぐる諸種の生産關係に至ることである。(第八節)

斯くして經濟現象が觀察されるが、その觀察は地域的特殊性を明かにしそれが如何なる地理的條件の結果である

かを考究する爲めのものである。地域的特殊性は經濟現象の本質と時間の経過と地理的條件とで定まるが故に、經濟學的・歴史的考察が地理學的考察と共に常に必要である。(第五節)

經濟現象は地理的環境ともなる。經濟現象の一國に於ける總括的全體が表すところの經濟的發展の段階は、文化環境中の最も基本的なものと考へられる。特定の經濟現象が他の經濟現象に對して原因として見らるべきか結果として見らるべきかは事實上の關係で定まるが、大體に於いて經濟現象の集團はそこに所屬する經濟現象の環境である場合が多いであらうし、一地域内の各産業中重要な地位を占める産業が同様に環境である場合が多いと思はれる。(第六節)(昭和十二年五月廿二日記)

アルフレット・ケーラーの労働者解放理論

藤 林 敬 三

目 次

- 一、労働者解放理論の問題に對する諸限定
- 二、資本の消耗とその保有量に關する理論的分析
- 三、技術的進歩の諸形態
- 四、社會的平均資本密度の増大と労働者の解放
- 五、被解放労働者の創出過程と合理化利潤に依る補償作用の吟味
- 六、賃銀低下とインフレーションに依る補償作用の吟味
- 七、ケーラーの労働者解放理論に對する批評

大戦後の、そしてまた特に一九二九年以後の異常な失業現象を反映して、從來の補償説に對して、ドイツの學界に於いて、先づこれに衝撃を加へたものがレーデラーの「技術の進歩と失業」に關する理論であり、更らにケーラー